

【活動報告】11/12～18 府中市生活援護課との協働・連携事業を実施しました

11月12日(木)13日(金)17日(火)18日(水)に、府中市生活援護課と本学との協働・連携事業を実施しました。府中市内在住の、経済的な困難を抱える家庭の中学生(2・3年)が対象の学習支援教室(市内4カ所)で、本学の学生が話をする機会をいただきました。

本学への依頼をうけて、10月に府中市の担当者と本学の学生で、打ち合わせをしました。学生への依頼の趣旨は、「(学習支援教室に来ている中学生は)外の世界と接する機会が少なく、狭い世界の中で自分の可能性を過小評価してしまう傾向がある。そこで、大学生と直接関わり合い、リアルな大学生活などを共有することで、子どもたちが自分の未来について考えるきっかけを作る」ということでした。



外語祭前という時期だったので、できるだけ顔を合わせての打ち合わせの回数を減らし、メーリングリストで情報共有しながら、教室で話すことを準備してきました。

本学からは3年生以上9名の学生がこの事業に参加しました。それぞれの日に4名づつ(最終日は3名)教室に伺い、以下のような流れで、活動を進めました。

1) 学習支援教室で毎週活動しているボランティア、府中市担当者と打ち合わせ

2) 教室開始、東京外国語大学について概要説明、外語祭の案内

3) 子どもを4グループに分け、それぞれのグループに学生が1名づつ入り、話をする。20分づつ4回繰り返す

4) 参加している子どもたち、本学学生、教室スタッフと一緒に、学生から聞いた話についてシェア、ふりかえりをし、活動終了

学生にとっても、今までの大学生活をふりかえり、考えを深め、成長する機会となったことと思います。

本学学生の活動レポートを紹介します。(抜粋)

中学生という時期は外と関わる機会が(自分の場合は)ほとんどなく、学校の中のコミュニティで生きている感じがあります。その中で、こうして大学生の生の経験が聞けると言うのは自分が経験したかったという意味においてもかなり貴重なものだと思います。今回のような企画が普及していけばいいなあと思います。教室についている大人や学生のボランティアの方々との協働もうまくいっており、私たち話をする側も緊張しすぎることなく企画を進められました。

(言語文化学部英語専攻3年 関谷昂)

正直話す内容については悩みました。「海外での経験を語ることは自慢話に聞こえる」という声があったと伺ったので、なんとか中学生にとって現実離れしていない、且つ中学生が生きる世界とつなげながら将来の世界を広げる話ができないかと考えました。そこで中学生にまず自分たちのことについて話してもらい、中学生の子どもたちがどんなことを思っているのか聞いてみることにしました。何が好き?と訊ねると「イチゴが好き、スポーツが好き、歴史が好き、人と話したり人と関わるのが好き」と。そこからつなげて将来はどんなことをしたい?と聞くと「イチゴが好きだからイチゴ農家になりたい、本が好きだから編集者になりたい、人と関わるのが好きだから人の役に立つ仕事がしたい、あるいはコミュニケーションをとるのは苦手だけどだからこそそれを克服している人々と向き合う

ことがしたい」と素直な思いを話してくれました。

私は自分が中学生の時こんなことが好きでこんなことをしたかったけど大学生の今に至るまでいろんな経験や出会いを通じて好きな気持ちはそのままに、してみたいことは変わったんだよという話をしましたが、私が出会った中学生たちはそれぞれに好きなものや考えていることがあって、もしかしたら私が話をしなくてもこれからの人生でのいろいろな出会いの中でちゃんと将来への思いを深めていくことができるのではないかなと思いました。もちろん、彼らにとって私との出会いが何か将来の世界につながるものとなったのなら、それはとても嬉しいです。

(外国語学部イタリア語4年 黒澤こと美)

「外大生が中学生の世界を広げる」というテーマだったようなので世界の話ばかりみんなしてしまっていたように思いますが、最後の反省会に中学生が「外語大はいろいろなことが体験できてとてもよい学校だった」や「海外にいくととてもいいと思った」などと話していて心苦しくなりました。

“外語大、海外に行かなければそういった体験ができないんだな、外語大に通ったり海外に行ったりしている大学生さんたちは「向こう側」のひとたちで、私たちと違って特別なのかな、日本よりも海外がいいな”と生徒に思わせてしまったのだったらそれは大きな間違いで、それでは中学生たちの「世界」を狭めてしまったように思えます。

そもそもおそらく「世界」を広げる」というテーマの「世界」というワードのとらえかたが外大生参加者のなかでも(私自身も)狭かったのかな、と思います。

きっとこの場合の「世界」は文字通りの世界地図の世界、場所的な世界や海外のことではないですよね？

本当は「中学生たちとは違う人生観や価値観、ものの考え方やとらえ方を話し、中学生が自分たちとはまた生きる尺度が違う人たちと出会うこと」によって中学生の「世界」(人生の尺度や生きる世界観)の幅を広げてほしいということだったのだと、終わって気づきました。もっと共感できるような身近な話題を話してあげればよかったととても後悔しています。

(国際社会学部ラオス語3年 高世濤)

市役所の方が会場や機材を準備してくださったおかげで、支援教室の内容そのものに集中することができたと思う。普段から参加する大学生や職員の方々も同席することで、中学生が自然体で話を聞いてくれたように感じられた。

(国際社会学部フランス語3年 十川優花)

普段接する機会のない中学生の生徒たちと話すことで、とても良い刺激をもらえ、参加して本当に良かったと感じた。自分のようにあまり自分から行動を起こさないタイプの学生にも、楽しいのでぜひ参加してほしい。

(国際社会学部ベンガル語3年 吉本真理子)

中学生の頃、私は部活のことやクラスのことでもいつも悩んでいたのをよく覚えています。学校の中の閉鎖的な人間関係が苦しくてたまらず、いつか広い世界で人の役に立つ生き方がしたいと強く願っていました。そんな気持ちがあったから、現在は外大でタイ語を勉強している自分がいます。

中学生のときの自分と大学生のいまの自分が地続きであることをもっと上手に話せればよかったなあ、というのがまず一番の反省点です。

生徒とお話する中で、もっと継続的に関わればいいのになあ、と思う気持ちが強くなりました。自分にとっても、そういえば中学生の頃はこんなこと考えていたな、と振り返る非常に良い機会になりました。相互に得るものがあると思いますし、このような機会に恵ま

れたことに感謝しています。

特にこれから就職活動を始めよう、という私のような学生にとっては、自己分析や人前で話すための良い経験になると思います。今後外大でこのような活動がさらに拡充していくと聞き手の生徒にとっても話し手の学生にとっても得られるものが多いのではないかと思います。ありがとうございました。

(国際社会学部タイ語3年 岡田佳子)

私は、ミャンマー留学までの経緯と留学の話をメインに話しました。中学生にとって、なじみの薄い国なので中学生が飽きてしまったらどうしようと不安でした。しかし、みんな自分の話を真剣に聞いて、質問を積極的にしてくれるのがとても嬉しかったです。20分と言う時間はあっという間に過ぎていくように感じました。1日目は、初めてだったので少し緊張してしまいました。しかし、回数を重ねていくうちに、中学生の反応を見たり、クイズ形式にしてみたりと工夫を行っていきました。ミャンマーは知らない国だからこそ、自分たちが住む国と同じところ・違うところに興味を持ってくれたようです。……

最後に行う反省会で、中学生の男の子が「情報がありすぎた」というコメントをされていて、衝撃を受けました。20分×4人の話を聞くことは、中学生にとって決して少ない時間ではないはずなのに、それだけ真剣に話を聞いて吸収してくれていたのだと思います。話をした私たちにとって、とても嬉しい感想でした。

(外国語学部ビルマ語4年 吉野恵)

自分の話と言われて私がこれまでやってきたことをメインで話してしまいましたが、中学生の子の反応や感想を一部聞いて感じたのは、もっと外国につながる話をすれば良かったかなということです。外大にいても日本のことも勉強できるんだよ、ということを伝えられたのですが、やはり外大生だからこそ外国の話をした方が中学生も新しい発見があるのではないかと思います。ただ人それぞれ興味が違うと思うので、一人でも日本について見つめ直すきっかけになってくれたらいいなと思いました。あと話したいことが多くて、中学生と会話のキャッチボールがあまりできなかったこと、伝えたいことが一貫していなかったことが反省です。

(言語文化学部日本語3年 須藤楓)

中学生の振り返りだけでなく、スタッフ間の振り返りにも参加させてくださった。初対面の相手との一度きりの会なので、進行方法や雰囲気などが適切だったかわからなかった。フィードバックをもらえて納得することができました。

(外国語学部フランス語4年 田中綾音)

日時: 2015年12月16日